

「……お、おい、なんだってんだよ……」

少女の鋭い視線に晒されながら言葉を制止された士道は、気まずい空気の中そこに立ちつくしていた。

「……もう一度聞く。おまえは、何者だ」

少女が苛立たしげに言い、目をさらに尖らせる。

と、その瞬間、ようやく右耳に琴里からの声が届いた。

『士道。聞こえる？ 私の言うとおりに答えなさい』

「お、おう」

『——人に名を訊ねるときは自分から名乗れ』

「——人に名を訊ねるときは自分から名乗れ。……って」

言ってしまったから、士道は顔を青くした。

「な、何言わせてんだよ……っ」

だが時既に遅し。士道の声を聞いた少女は途端表情を不機嫌そうに歪め、今度は両手を振り上げて光の球を作りだした。

「い……ッ」

慌てて床を蹴り、右方に転がる。

一瞬あと、士道の立っていた場所に黒い光球が投げつけられた。床に、二階一階まで貫通するような大穴が開く。

ついでに士道はその瞬間の衝撃波でさらに吹き飛ばされ、机と椅子を盛大に巻き込みながら教室の端まで転がった。

「……っぐあ……」

『あれ、おかしいな』

「おかしいじゃねえ……ッ、殺す気か……っ」

心底不思議そうに言ってくる琴里に返し、士道は頭を押さえながら身を起こした。
と——

「これが最後だ。答える気がないのなら、敵と判断する」

士道の机の上から、少女が言ってくる。士道は泡を食って即座に口を開いた。

「お、俺は五河士道！ この生徒だ！ 敵対する意思はない！」

「……」

両手を上げながら士道が言うと、少女は訝しげな目を作りながら士道の机から下りた。

「——そのままにいる。おまえは今、私の攻撃可能圏内にいる」

「……っ」

士道は了解を示すように、姿勢を保ったままこくこくとうなずいた。少女が、ゆつくりとした足取りで士道の方に寄ってくる。

「……ん？」

そして軽く腰を折り、しばしの間士道の顔を凝視してから「ぬ？」と眉を上げた。

「おまえ、前に一度会ったことがあるな……？」

「あ……っ、ああ、今月の——確か、一〇日に。街中で」

「おお」

少女は得心がいったように小さく手を打つと、姿勢を元に戻した。

「思い出したぞ。何やらおかしなことを言っていた奴だ」

少女の目から、微かに陰しさが消えるのを見取って、一瞬士道の緊張が弛む。

だが、

「ぎ……っ!？」

刹那の間あと、士道は前髪を掴まれ顔を上向きにさせられていた。

少女が、士道の目を覗き込むように顔を斜めにしながら視線を放ってくる。

「……確か、私を殺すつもりはないと言っていたか？ ふん——見え透いた手を。言え、何が狙いだ。油断させておいて後ろから襲うつもりか？」

「……………っ」

士道は、小さく眉根を寄せ、奥歯をぎりりと噛んだ。

少女への恐怖とか、そんなものより先に。

少女が士道の言葉——殺しに来たのではない、というその台詞を、微塵も信じる事ができないのが。

信じる事ができないような環境に晒されていた、というのが。

気持ち悪くて、たまらなかった。

「——人間は……ッ」

思わず、士道は声を発していた。

「おまえを殺そうとする奴らばかりじゃ……ないんだッ」

「……………」

少女が目丸くして、士道の髪から手を離す。

そしてしばしの間、もの問いたげな視線で士道の顔を見つめたあと、小さく唇を開いた。

「……そうなのか？」

「ああ、そうだとも」

「私が出た人間たちは、皆私は死なねばならないと言っていたぞ」

「そんなわけ……ないだろッ」

「……………」

少女は何も答えず、手を後ろに回した。

半眼を作って口を結び——まだ土道の言うことが信じ切れないという顔を作る。

「……では聞くが。私を殺すつもりがないのなら、おまえは一体何をしに現れたのだ？」

「っ、それは——ええと」

『土道』

土道が口ごもると同時、琴里の声が右耳に響いてきた。

「——また選択肢ね」

琴里はぺろりと唇を舐めて、スクリーンの中央に表示された選択肢を見つめた。

①「それはもちろん、君に会ったためさ」

②「なんでもいিদろ、そんなの」

③「偶然だよ、偶然」

手元のディスプレイに、瞬時にクルーたちの意見が集まってくる。①が人気だ。

「②はまあ、さっきの反応を見る限り駄目でしょうね。——土道、とりあえず無難に、君に会うためとでも言うっておきなさい」

琴里がマイクに向かって言うと、土道が画面の中で立ち上がりながら口を開いた。

『き、君に会うためだ』

『…………?』

少女が、きよんとした顔を作る。

『私に？ 一体何のために』

少女が首を傾げてそう言った瞬間、またも画面に選択肢が表示される。

①「君に興味があるんだ」

②「君と、愛し合うために」

③「君に訊きたいことがある」

「ん……どうしたもんかしらねえ」

琴里があごをさすっていると、手元のディスプレイには②の回答が集まっていった。

「ここはストリートにいておいた方がいいでしょう、司令。男気を見せないと！」

「はっきり言わないとこの手の娘はわからないですって！」

艦橋下段から、クルーの声が響いてくる。

琴里はふうむとうなつてから足を組み替えた。

「まあ、いいでしょ。①や③だとまた質問を返されるだろうし。——士道。君と、愛し合うために、よ」

マイクに向かって指示を発する。瞬間、士道の肩がビクツと震えた。

「あー……その、だな」

琴里からの指示を受けた士道は、しどろもどろになって目を泳がせた。

「なんだ、言えないのか。おまえは理由もなく私のもとに現れたと？ それとも——」

少女の目が、再び険しいものになっていく。士道は慌てて手を振りながら声を発した。

「き、君と……愛し合うため……に？」

「……………」

士道が言った瞬間、少女は手を抜き手にし、横薙ぎに振り抜いた。

瞬間、士道の頭のすぐ上を風の刃が通り抜け——教室の壁を切り裂いて外へと抜けていった。士道の髪が数本、中程で切られて風に舞う。

「ぬわ……ッ!？」

「……冗談はいらない」

ひどく憂鬱そうな顔をして、少女が呟く。

「……………」

士道は、唾液を飲み下した。

一瞬にして今し方感じていた恐怖が薄れ、心臓が高鳴っていく。

——ああ、そうだ、この顔だ。

士道が大嫌いな、この顔だ。

自分が愛されるなんて微塵も思っていないような、世界に絶望した表情だ。

士道は、思わずのどを震わせていた。

「俺は……ッ、おまえと話をするために……ここにきたッ」

士道が言うと——少女は意味がわからないといった様子で眉をひそめた。

「……どういう意味だ？」

「そのままだ。俺は、おまえと、話したいんだ。内容なんかなんだったっていい。気に入らないなら無視してくれたっていい。でも、一つだけわかってくれ。俺は——」

『士道、落ち着きなさい』

琴里が、諫めるように言ってくる。しかし士道は止まらなかった。

だって、今までこの少女には、手を差し伸べる人間がいなかったのだ。

たった一言でもあれば状況は違ったかもしれないのに、その一言をかけてやる人間が、一人もいなかったのだ。

士道には、父が、母が、そして琴里がいた。

でも、彼女には、誰もいなかったのだ。

だったら——士道が言うしかない。

「俺は——おまえを、否定しない」

士道はだん、と足を踏みしめると、一言一言を区切るようにそう言った。

「……………」

少女は眉根を寄せると、士道から目を逸らした。

そしてしばしの間黙ったあと、小さく唇を開く。

「……シドー。シドーといったな」

「——ああ」

「本当に、おまえは私を否定しないのか？」

「本当だ」

「本当の本当か？」

「本当の本当だ」

「本当の本当の本当か？」

「本当の本当の本当だ」

士道が間髪入れず答えると、少女は髪をくしゃくしゃとかき、ずっと鼻をすするかのような音を立ててから、顔の向きを戻してきた。

「——ふん」

眉根を寄せ口をへの字に結んだままの表情で、腕組みをする。

「誰がそんな言葉に騙されるかば——かば——か」

「っ、だから、俺は——」

「……だがまあ、あれだ」

少女は、複雑そうな表情を作ったまま、続けた。

「どんな腹があるかは知らんが、まともに会話をしようという人間は初めてだからな。

……この世界の情報を得るために少しでもだけ利用してやる」

言って、もう一度ふんと息を吐く。

「……は、はあ？」

「話しくらいしてやらんこともないと言っているのだ。そう、情報を得るためだからな。

うむ、大事。情報超大事」

言いながらも——ほんの少しだけ、少女の表情が和らいだ気がする。

「そ、そうか……」

士道は頬をポリポリとかきながらそう返した。

これは……とりあえずファーストコンタクトに成功したと考えていいのだろうか。士道が困惑していると、右耳に琴里の声が響いた。

『——上出来よ。そのまま続けて』

「あ、ああ……」

と、少女が大股で教室の外周をゆつくりと回り始めた。

「ただし不審な行動を取ってみろ。おまえの身体に風穴を開けてやるからな」

「……オーケイ、了解した」

士道の返答を聞きながら、少女がゆつくりと教室に足音を響かせていく。

「シド」

「な、なんだ？」

「——早速聞くが。ここは一体何なんだ？ 初めて見る場所だ」

言って、歩きながら倒れていない机をペタペタと触り回る。

「え……ああ、学校——教室、まあ、俺と年代くらいの生徒たちが勉強する場所だ。その席に座って、こう」

「なんと」

少女は驚いたように目を丸くした。

「これに全て人間が収まるのか？ 冗談を抜かすな。四〇近くはあるぞ」

「いや、本当だよ」

言いながら、士道は頬をかいた。

少女が現れるときは、街には避難警報が発令されている。少女が見たことのある人間なんて、ASTくらいのものなのだろう。人数もそこまで多くはあるまい。

「なあ——」

少女の名を呼ぼうとし——士道は声を詰まらせた。

「ぬ？」

士道の様子に気づいたのだろう、少女が眉をひそめてくる。

そしてしばし考えを巡らせるようにあごに手を置いたあと、

「……そうか、会話を交わす相手がいるのなら、必要なだな」

そううなずいて、

